

# 大阪大学図書館報

Vol. 4 No. 2 March, 1970

## “諸行無常”

— 図書館をめぐる —

犬 養 孝

わたくしは、敝衣破帽長髪の五高生のむかし、冬休みを薩南指宿の海岸にすごした。そこは、こんにちのような新婚旅行コースとはちがって、かりに一對の男女が歩いていけば、村の子らが、あとからぞろぞろついていって、「しんこん、れんこん、よかあバイ」とはやしたてるような風景が見かけられた。湯治客のほかは誰もおとずれない海岸の温泉で、北の瀉口の海岸からは桜島がのぞまれ、サボテンが自生し、松原には野天のいで湯がこんこんと湧き出し、冬の一月に菜の花は咲きほこって、ここばかりはすでに春の世界であった。

わたくしは、毎日、『平家物語』をたずさえていって、砂浜の漁船のかげにはらばい、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」からはじまって、終曲まで、来る日も来る日も、声高らかに節をつけ、よみあげ、よみふけていった。声をやめれば浪音がきこえ、ふりかえれば濃紺の海があって、鬼界が島を、はるかかなたに思うことができた。

全巻をよみ終った日、長大な人間絵巻と終始一貫したその詩情に、深い感動をおぼえて長大息した。青春の日、薩南の海辺で完読した“諸行無常……”の感動はいつまでもはなれるところがない。

わたくしは、中学生のころから“国語”は好きであったが、“国語”の時間は好きではなかった。それは読んで訳されるばかりで、なんの内容にふれるところもなかった。東京の中学に学んだわたくしは、上野図書館にゆくことをおぼえて、放課後は、ただちに上野に直行し、図書を借り出した。少年から見れば、まさに書物の宝の山にはいったようなものである。学校の教科書の漱石「峠の茶屋」のところで、「おまえら、よめばわかるだろう」と、先生のとぼした部分も、『草枕』を完読してみれば、「鶯は鳴くかね。」「ええ、毎日の様に鳴きます。此辺は夏も鳴きます」の問答の意味もわかるような気がした。ませた生意気な生徒であったのだろう。わたくしは教科書の抜萃文の原典をつぎつぎ完読するのに興をおぼえた。図書館というものの無限のたのしさである。

武夫原頭の図書館もやすらぎの場だったし、月ごとの希望図書のかなえられてゆくことに、図書館の充実してゆくような喜びをもおぼえた。薩南指宿の平家の完読も、中学生の習慣の発展であったろう。緑にかこまれた大学の図書館での読後のコーヒーの味も忘れられない。

戦後、わたくしは台北からひきあげるにあたって、それまでの蔵書をすべて椰子樹下に失なってしまった。荷物といっしょに入れてきたのは岩波文庫の白文・新訓万葉集四冊だけだった。

東京の家が焼けていて宿なしだったら、お茶の水の橋の下でもいい、この本さえあればという“決意”だった。煩惱は絶ち切りがたいが、青年の日の“諸行無常”は瞬間にしてわたくしにこの“決意”をさせてくれた。

旧制台北高校でも大阪高校でも、講義のかたわら、図書館の仕事にたずさわった。月ごとに佳い本がふえてゆくのはこの上ないたのしみである。この中から誰かはすばらしいものを獲得してゆくにちがいない。大阪大学でも長いこと図書館委員をさせていただいたし、中学生の上野図書館以来、わたくしと図書館とは、はなれえないものとなってしまった。わたくしは近く退官するにあたって、感慨ひとしおであるとともに、図書館の充実発展と、学生諸君の読書研究のゆたかなみりを、いのらないではいられない。

日暮れて道遠し。青春の日の薩南海岸の“諸行無常”の響きが、昨日のこのようによみがえるのである。こんにちまでの波音のなかには有為転変があったが、こんどは皆さんのあたたかい友情だけをたずさえて去るのであろうか。  
(教養部教授)

## 図 書 館 雑 感

北 橋 忠 宏

昨年夏、一か月ばかりの間、余儀なく図書館の閲覧室で多くの時間を送った。そのある日、研究室の者に誘われるままに、はじめて一階の開架室をのぞいてみた。大きくはない部屋の中で数学関係の教科書、参考書の類が、当然のこととはいえ大阪の最も大きな書店のそれらよりも質、量ともに数等勝るほどであることを発見し、阪大というものの総体を再認識させられた。また、この少し前、理学部が封鎖されるまでほんの一週間ほどのある日、必要に迫られて数学科の図書室に学会雑誌を捜しに行くことがあった。小じんまりとした部屋のスチールの書架には、赤青、大小、新旧とりどりの書物がぎっしりと並んでいた。目指す本を求めて、それらを少し詳しく眺めて驚いた。何喰わぬ顔をした列のあちこちに私の生まれるずっと以前からの書物が点在するのである。このとき私はまさに阪大の歴史そのものを感じた。阪大の図書館を通じてこのような印象をごく最近になって受けたことは、私が図書館をほとんど利用しない人種に属することを暴露もしたが、それと同時に、「ある集団にとって図書館はその集団の顔である」という言葉の意味をもいくらか理解させてくれた。私が図書館を利用するのは、部屋の掃除をする場合と同様に徹底的な必要に迫られたときであり、それだけに成り振り構わずに行動することが多い。このような形をとる最大の要因はぐうたらな性格にあるのだが、もう一つには趣味の問題でもある。私は自分が必要とする書物はたいてい買い求めておき、好きなときに好きなように利用したいのである(だいたい積読という形態をとるのだが)。寡読な私には経済的にもこれが可能である。ところが、肝心のときに肝心の書物がないのが世の常なのである。図書館を利用させてもらうのはまさにこのときなのである。

現在、図書館まではほんの少し足を運ばねばならないため、いっそう図書館を利用しなくなった。そうしてみると、二年前までの工学部時代にはまだ図書館を利用していた。それは電気図書室が研究室の前にあり、そのうえそこにはよく本が揃っていて多くの恩恵を被ることができたからである。私のようなものぐさ男でも、いやそれだけに、便利であればすすんで利用するのではなからうか、しかも、私のような人種は案外多いのではあるまいか。とすれば、図書館につきのような機能を付加することは大いに意味のあることでもあり、どこかですでに実行に移されているであろう。それは、たとえば、計算センターの計算機との対話用として各研究室にひかれたタイプライターを用いて、計算機に希望する文献の複写や関連する文献の調

査を依頼すると、待つほどもなく関連する文献名がタイプアウトされ、必要な文献の複写の手配ができるといった機構である。

私の貧弱な経験から思いうかぶのはこのような他愛もないことでしかない。そこで、図書館を比較利用している人達に意見をきいてみた。するとそのうちの一人が、阪大の中央図書館は変化する時代への即応性に欠けるきらいがあるのではないかというのである。とくに電子計算機関係の新刊雑誌など、急激な変化を遂げる分野における雑誌類の取り入れ方が遅れているという。私はこれを聞いて、その真為のほどはべつとして、この指摘の中に図書館のもつ問題が集約されるのではないかと考えた。というのは、まず、図書館蔵書の選定基準はどうであるべきなのだろうかという疑問が起きる。これをはっきりさせようとするれば図書館そのものの存在意義にまで溯らざるを得まい。

この問に対する回答は、社会の変化に応じて変化する要素を含んだものとなり、いわば永遠の問題となるだろう。とはいえ、その時々に応じた回答を与え、これを実現して行かねばならない。このためには図書館運営の決定機関の機構および、その決定権の及ぶ範囲などが問題になる。これらの点での不備が、限られた予算と利用者からの要請および理想像との兼ね合いや図書内容の判定の難しさなどを通じて、購入図書の決定の遅れという形で現われ、時代への即応性を失わせているのではなからうかと考えられるのである。このような懸念が単なる杞憂であれば幸いなのだが……

(基礎工, 電気, 助手)

#### 学生希望図書——本館——

昭和45年1～2月のリクエストで受入  
済のもの

東洋文庫 平凡社

ルカーチ著作集 第1巻 魂と形成

Lukacs Georg 著 白水社  
城塚登, 古田光共訳

白鳥庫吉全集 全10巻

榎 一雄 等編 岩波書店

法哲学概論 碧海純一 著 弘文堂

科学技術要覧 44年版

科学技術庁 編 大蔵省印刷局

現代数学の系譜 第一期 全10巻

功力金二郎 等編 共立出版

記号論理学とその応用

石谷 茂 著 大阪教育図書

位相幾何学 小松醇郎 等著 共立出版

生物物理化学研究法 I, II

今堀和友 等編 朝倉書店

日本の風景 緑川洋一 著 東京新聞

#### 教官著作寄贈図書

——本館——

増田祥三(教 助教授)

技術における構成幾何学・下巻

広嶋英雄(教 教授)

スキー上達法(ガイドシリーズ9)

スキー10日間( " 10)

S.42 創元社

成田耕造(蛋 教授)

生命とは何か?(大阪大学開放講座:  
機械文明の中の人間 5)

S.44 大阪科学技術センター

平下欣一(教 教授)

自由の概念と諸相 S.44 法律文化社

——中之島図書分館——

熊原雄一(医 助教授)

Radioimmunoassay: 放射免疫測定法  
S.45 朝倉書店

奥野良臣(微研 教授)

微生物学シリーズ麻疹・風疹  
S.44 朝倉書店

立入 弘(医 教授)

放射線医学入門 第6版 S.45 南山堂

——工学部分館——

小松定夫(工 教授)

薄肉構造物の理論と計算 I  
S.44 山海堂



## 教養と図書館

手 島 誠

教養生としていちばん痛切に感じることは、教養部に核となるようなもの、あるいは、場所が存在していないということです。学生は一日の大部分を講義のためにさき、講義から講義へと渡り歩いています。勉強用・対話用に、拠点にできる十分な物理的な場が確保されていません。さらに、その講義の魅力のなさ、講義相互の間の有機的な連関のなさがあいまって、学習上・精神上のより所もないといえます。場の欠除による根無し草的学生にとっては、単位を落とさないことが、大学での学習の主要目標になってきます。多くの学生が抱えている教養課程への不満は、一般教養が、大学において明確に位置づけされていない結果、出てきたものだとよくいわれています。ところで教養課程は、学問の専門化・技術化のなかで、より広い視野から「自然や人間や社会について、その価値や理念をつかみとる」という目的のもとに設けられたものです。

しかも、真理を探求し現実を批判・変革していくことが大学の前提条件ですから、それらに見合った教育が、一年次からなされる必要があります。そのために、一般教育は永続的・創造的であるべきです。永続的とは、前期二年に限定して履修するのではなく、四年間にわたらせることです。初めから画一的・総花的に与えられた課目を受けるのではなく、みずから専門を勉強する過程で、それに関係する種々の分野のものを取りこんでいくというものです。次に創造的というのは、従来の自明の結論・既成の方法による学習ではなく、生の混沌とした素材を前にして、みずからが苦しみながら、体系づけていくということです。このような場合には、学生は意欲的にならざるをえません。

この永続的創造的な一般教養に、学生が意欲的にとりくんで、それらを統合していく場としての役割を、図書館に期待したいのです。清新にして示唆に富む授業に主体的にとりくむには、深い専門知識と、広い分野にわたる情報を要しますが、これにこたえられるのは図書館において他にありません。もちろん、大学内に根本的な改革の動きを見出せない状態において、図書館に過分の期待をよせるのは筋違いかもしれませんが、状況の先取りを図書館に願うものなのです。そのための具体的な要求としては、ひごろ要望の出ている図書の充実を、緊急の最重要の要求としてまずあげねばなりません。

さらに他館・諸研究室の文献の相互交換、全阪大総合目録の完備、開架できない書物のレジュームの作成などによって、飛躍的に充実するものと思われます。また書物の活用、一例としては、雑誌のバックナンバーを整理し、禁帯出図書の副本をふやして、雑誌・辞典等の短期貸出ができるようにするなどがあります。「良き運営には、運営委員・運営する図書館・利用者の積極的な協力が」必要であると、図書館のしおりにも書かれていますが、現実には、学生の声はそれほどすい上げられてはいません。そこで年度はじめに三者の協議会を開いて、図書購入等について話しあうのはどうでしょうか。また、一人で思索し学問するための場として、席の増設・閲覧室の拡張も望まれます。

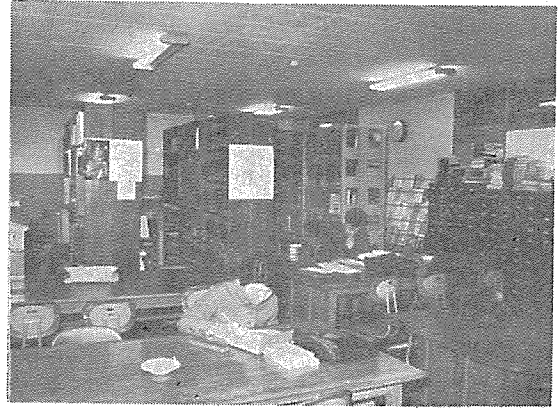
知識・情報の中心として、また、教養生の学問の中心として、図書館が教養の核となるべく、今後進んでもらいたいのです。

(法学部, 1年)

## ☆☆☆ 分館めぐり ☆☆☆

## —文学部資料室—

今、大阪大学の一学生が一冊の図書を閲覧したいと希望しているとする。彼はまず附属図書館へ行ってみるだろう。そこで開架書架の間をさまよって探したが見当たらない。カードを引いてもだめ。係員にたずねてみる。係員は大学の総合カタログ（これは専門家でないと検索することはまず困難な代物である）によって所在をつきとめ、文学部に行けと指示する。そこで彼のやって来るのが文学部資料室である。ここでは係員が彼の希望する図書の内容分野から判断しておよその見当をつけて二、三の研究室別図書カードの検索を指示する。該当する図書はある研究室のカードの中にあつたが、その分類番号の表示する書架に目指す本はない。係員の調べによりこの本は教官の研究室に別置されていることが判明する。係員は当該教官の講義日を教え、出直して直接教官に借用を願い出るように説得してお引取り願う。彼が別の日に出直して首尾よく目的を達したかどうかはわからない。彼が手にするのに要した時間と労力のためにいっそうその本を熟読する気になったとすればこうした障害の教育的価値も満更でもなからうが、大変な無駄をさせていることになる。しかし、現在の文学部の資料室ではこうした例も決して極端な例外としてすませることはできない。



文学部資料室は合同研究室なる別名の示すように各研究室の図書の寄せ集めの如きものである。各研究室がその年間予算の内から必要な図書の購入を請求し、附属図書館の蔵書として受入れられた図書を公用借出の形で学部を持ち帰り、合同研究室で保管し、閲覧に供するという仕組みになっている。部室はA、B、Cの三室に分かれ、図書は研究室単位に分けて配列されている。図書の利用については教官はもちろん学生に対しても一切の制限なく、自由に書庫内の検索、閲覧、帯出を許す完全な自由接架式とし、文学部の教育・研究に特に大きな比重を持つ図書の利用に最大限の便宜を計ることを建前としている。図書室と称すべき何の設備もない狭いスペースに大雑把な勘定でも十萬を越す図書と、四百人以上の潜在的利用者と五名の係員が雑居してひしめいている。この混雑をきわめる部室というのが実態である資料室としてはこの建前だけが唯一の長所であった。しかし近年これもとみに威力を失ってきている。年間一万余冊になる図書の増加に対して発足当時のままのスペースでは収容が不可能になって数年を無為無策のままに経ている現在である。はみ出した図書はやむなく教官の研究室に別置されたり、限られたスペース内での秩序ある配列が不可能であったり、図書のlocalizationは複雑多岐をきわめ、あやうく混沌状態におちいらんとしている。このことは、大学全体の図書館行政の中に位置づけるべき問題であるにしても、文学部としても「図書が身近にあることの便利」から発足させた資料室のシステムであっても「便利」がいずれ「不便」に通じることの認識や、学部全体の図書の在り方についての長い、広い視野に立つ展望に欠けていたことは否定できない。

(多胡 記)

## —指定図書の推せん—

45年度指定図書(専門・教養課程とも)の推せんは、専門課程が3月31日、教養課程が4月10日までにおねがいします。今まで新年度になってから推せんしてもらっていましたが、前期の授業に間に合うよう、昨年从前年度中に推せんしていただくことにしています。推せん用紙は部局事務部を通じてお届けします。詳しいことは、図書館委員または受入掛長まで。



## マイク

- 2号から、“いずみ”“プリズム”欄を新設いたしました。これにより、利用者の声、図書館員の声をくみあげ、よりよい館報、そして、図書館をめざしています。積極的なご意見、ご注文を編集委員までお寄せください。
- 最近、図書、雑誌の1部切り取りが多く、その中には、再購入できない貴重な資料も含まれていて、利用者、掛員とも非常に迷惑しております。多くの利用者が気持ちよく、有効に利用できるよう、図書・雑誌等は大切に扱ってください。
- 工学部図書館仮事務所が下記に再移転いたしました。  
設置場所 管理棟一階 電話 06-878-5111 (内線 4080, 4081)

## —外国文献購入調査委員会 報告書を採択—

45.1.29 (木) 10.30 a.m~3.00 p.m 於 神戸商大

この委員会は昨年7月以来、4回にわたって検討してきたが、一応、予定の討議が終了したので、主査館である本館から報告書案を提案し、ほぼ原案どおり採択された。報告書は本文11ページ、別表2ページからなり、1. 予算の年度区分と雑誌の予約 2. 欠号補充の責任 3. 国内書店の性格 4. 予定価格の建て方 5. 支払方法 6. 直接取引きの可能性 7. 延納制度などについて討議の結果をまとめている。これは来年度に開かれる予定の近畿地区国公立大学図書館協議会に報告される。

## —近畿地区図書館業務機械化委員会—第10回—

45.2.12 (木) 10.30 a.m~4.00 p.m 於 中之島分館

京大事務部長報告：高性能PC Sは、現場の受入れ態勢が不十分であるとして、予算化されなかった。文部省では各地区での研究会で機種についても再検討してほしいと言っている。

午前中、京大数理解析研坂東図書掛長から「PPBS(注 Planning Programming Budgeting System 計画別予算決定方式)について」と題して、現在、文部省情報図書館課を中心に研究を進めている「情報化社会における図書館資料の激増と利用者の急増に対処し、教育・研究上必要とするものを、利用者に迅速かつ的確に提供する」ことを目的とした計画について報告を聞いた。その中で文部省のPPBSの委員でもある報告者は、大規模図書館では将来ディスク付

きのミニ・コンピューターを、中ないし、小規模にはPC Sか簡易機械化装置を導入することが望ましい。ただし、情報検索をするにはミニ・コンでは不充分であり大型コンピューターを地区共同利用することも考えられるとのべた。

午後は、神大教養部分館柴田正美氏が、前回、阪大、大市大、京大から提出された各部門のフローチャートを修正し一元化したチャートについて報告した。これに対して①完全なPC Sでありコンピューターが役立っていない。②各種パンチカードの中の利用頻度の高い項目は、なるべく初め（左側）にまとめるのが効率的である。③雑誌マスター・ファイルは、アプリベーションでなく原綴にし、複製カードは誌名コードによって処理すべきである。などの意見が出たので、これらの意見を採り入れたフローチャートを、柴田氏がもう一度作成して次回に報告することになった。

まとめ：最後に幹事館（京大）から、過去1年間の報告書の作成方法について提案があり、今回の報告書は、文部省が予算要求中の高性能PC Sについて討議してきた内容とそのフローチャートのモデルを中心とし、それにPC Sの限界、ディスクのついたミニ・コンピューターへの展開についての委員会の見解を付し、来年度の地区協議会総会に提出することになった。

#### ——近畿地区国公立大学図書館協議会——

“参考図書委員会”

45.2.25（水）10.30 a.m～4.00 p.m 於 中之島分館会議室

京大、京教大、阪大、大外大、大教大、府大、市阪、神外大。11名が参加。主査館（大阪外大）。

- ① アンケート（Ⅰ：参考データ Ⅱ：参考業務実績 Ⅲ：即時調査例一）の集計について。主査館で集計したものを2部作成し3月下旬に京都地区、大阪地区で検討する。また4月中にその結果をまとめるため両地区合同の委員会を開く予定である。大阪地区はⅠ、Ⅱを京都地区はⅢの分野を担当する。
- ② 各館所蔵の参考図書のリスト・アップについては①の合同委員会で再考する。

#### ——豊中地区運営委員会——

45.1.20（火）1.30～3.30 於 会議室

- ① 運営委員長の改選 1月末日で任期が切れる千原委員長(理)の後任に経済学部高田馨教授を選んだ。任期は2月1日から1年間。
- ② その他報告事項

#### ——中之島分館運営委員会—第35回——

45.1.9（金）4.15～4.30 於 会議室

任期満了に伴う次期分館長の改選 附属図書館中之島分館長選考規程に従い、同分館運営委員11名による次期分館長の選挙の結果、坂本幸哉現分館長が再選された。

## БИБЛИОТЕЧНОЕ ДЕЛО В СОЦИАЛИСТИЧЕСКОЙ БОЛГАРИИ

### プリズム

### 社会主義ブルガリヤにおける図書館事業

茂 幾 周 治

社会主義諸国の図書館活動については、あまりわが国において紹介されていないので、ソ連の図書館雑誌“Библиотекаръ”の中からブルガリヤの図書館活動についての紹介があったので、全訳した中からその国の図書館事情の概略を述べたいと思う。

昨年ブルガリヤは、社会主義革命25周年を迎えたが、図書館事業は、ソ連の援助を得て、かなり発達している。専門学校がスタッフのために開校されているし、国公立の機関である芸術、文化事業に関する委員会や協議会は、地域、町、農村での図書館活動に責任を負っている。キリル、メフォディー公共図書館が、ブルガリヤでいちばん大きなものであり、約100万冊の蔵書がある。たとえば、貴重な写本の collection や高価な古文書、外国の Reference Books、基本的な外国科学雑誌（1万種類）、念入りに整理された Monograph などがある。

同図書館は、目録カード作成、発行、出版準備、書誌索引の tools の編集など、わが国の国会図書館のような活動をしている。また政府諸機関、科学研究所、企業、読者等にテレタイプや複写技術でサービスを行なっている。その他、雑誌の cumulative 出版 catalogue の編集や、外国図書の新着速報などの活動も行なっている。

ブルガリヤ科学アカデミー中央図書館は、すべての専門図書館網の計画的発展を推進し、新しい図書の集中管理を行なっている。学術研究所の能力をもつ同図書館は、ブルガリヤの大きな情報機関である。革命前1944年までブルガリヤには、一つの大学とその附属図書館しかなかったが、現在は、医学、工学、農学、経済学など各種図書館があり、170万冊以上の蔵書と6万人の読者に対してサービスをする22の専門図書館がある。

1944年までブルガリヤにはなかった科学技術図書館も急速な成長をしている。現在この国は、企業、科学技術研究所、計画諸機関合せて155の科学技術図書館がある。図書館の蔵書は、60万冊以上ある。これらの図書館は、情報センターや科学技術情報局と緊密な連絡をとっている。

ブルガリヤには、大学、科学研究所、そして大きな医療機関に付属する54の医学図書館がある。ソフィヤにある最高医学研究所図書館がこれらの図書館に組織的援助を行なっている。またブルガリヤには、アカデミックな図書館、大学、学術、工学、農学などの専門図書館が605ある。これらの図書館の蔵書は、550万冊以上である。

図書館連合委員会というのが、目録統一規則や規定を作成する。その他この国で重要な位置を占めている地方図書館が27ある。地方図書館は、年間500万冊以上の本を貸出（同国の貸出冊数の20%）し、市民や労働組合のための図書館、学校図書館に援助を与えている。これら図書館が、党や政府の政策を啓蒙している。

以上スペースの都合上、各種図書館や、その他の図書館活動についての詳細な事情に触れられなかったのが残念ですが、ブルガリヤ図書館の概略を述べてみました。なおもっと詳しい事情を知りたい方は、“Библиотекаръ”の1969年12月号のP55～57をお読みくだされば、結構かと思えます。

（付属図書館、整理第一掛）

### 図書館業務機械化を見学して

45.2.24（火）参加者：受入掛長ほか10名（本館・中之島・工・理各館職員）

目的 図書館業務にコンピューターを導入することは必至である。そこで実際に導入して実績をあげているタイプのちがった二つの図書館の実務を見学した。



## 概要 ① 京都大学数理解析研究所図書室 (TOSBAC 3400)

理論物理、数学分野の全国共同研究所の図書室、図書費2,500万円は全額図書室で管理し、購入した資料は図書室におく、いわゆる完全な集中方式である。ここでは、コンピューター導入により合理化(たとえば、雑誌業務は従前の4分の1の時間で処理)した余力で館員の研修をやり、全員がレファレンス・ワークができるという。収集資料の中ではいわゆるインフォーマル・パブリケーション(プレプリント、レクチャー・ノート、テクニカル・レポートなど)が重視され、その受入速報作成の必要からコンピューター化をはじめた。続いて雑誌の受入管理、あるいは教官ごとの主題別の到着速報送付など、利用効果の高いものから順次プログラミングしてテストを重ね実行に移している。4月からは単行書の受入・整理もコンピューター化する予定でテストに成功とのこと。館員は全員文科系出身者であるが、ほとんどが自己研さんによりプログラミングができる。サービスは、所内研究者のみでなく全国の数理系図書室に開放しており、世界各国のインフォーマル・パブリケーションを組織的に収集している。

## ② 京都産業大学図書館 (TOSBAC 3400)

午前中の数研が研究図書館で図書以外の資料が中心であったのに対して、ここは単行書が中心である。大学全体が事務局も含めてコンピューターを使用しており、われわれも大いに参考とすべきだ。この受入・整理は全学の事務を一か所で集中整理し、ここから各学部の閲覧室に送っている。受入資料のちがいが機械化の重点も単行書におかれ、一般に機械化が困難といわれる整理業務をコンピューター化している。貸出業務の機械化もテスト済みである。

評価 附置研図書室で研究図書室的要素の強い①と、総合大学図書館で学習図書館的要素の強い②と性格がちがう両館がともにコンピューター化に成功し前進しているが、両者に共通するものとして、いずれも業務をほぼ集中化していることを重視しなければならない。機械化の前提として業務の標準化と集中が必要といわれることをこの2館はみごとに立証している。それに比べると本学の機械化が効率を上げるためには、まだまだ多くの障害を克服しなければならない。(浅野記)

## 梅花大学図書館を見学して

45.2.26 (水) 参加者：運用第一掛長ほか5名(本館・中之島・基工各職員)

かねてよりの諸先輩からその声価を伝え聞いていた梅花女子大学を見学する機会を得て感激すること多く、自館を省みてとり入れるべき点を多く持ち帰ることができた。

茨木の丘陵にある新しい装いの大学は、ユニークな伝統を伝えて進取の気風があふれていた。図書館では遠藤課長の説明と松島さんの案内、その後の質疑という経過である。

利用対象—学生1,700名 館員6名 建築延面積—1,250 m<sup>2</sup>(2階建て) 閲覧席110 蔵書35,000冊 図書費—8,186千円 年間貸出冊数28,200冊 という概要の中図書館で文学部(日本文学・英米文学)図書で構成されている。

印象、気付いた個々の点などを要約すると

- ① 遠藤課長ほか職員5名で庶務・整理・奉仕に分れ少数精鋭(平均年令33)であり全員相互に代替し合えること。それゆえみな活発、精力的である。
- ② 基礎的図書設備が充実・整備されていること。(目録類、配架図書・雑誌、閲覧机・いす、カウンター、ロッカー等の適正な整備)

- ③ 図書館での清潔・静粛が徹底していること。
- ④ 以上の結果として、真面目な図書館の利用者に対しては誠意のあるサービスをもって応える態勢となり、参考業務（レファレンス）においても新しい創意工夫を生んでいること。
- 以上、対応にあたられた遠藤課長との質疑対話、熱のある姿勢はわれわれに感銘の強い励ましであったと思います。 (岩井記)

## コンピューター講座 4月開講

情報化時代を迎えて図書館業務にもコンピューターが導入される可能性がでてきた。現実に入れわれの身近なところでも、コンピューターによる機械化で実績をあげているところが少なくない。その場合、まず問題になるのは、館員の中にある程度の予備知識をもって積極的にコンピューターリゼーションに取り組もうとするものがあるかどうかということである。

館員の中の機械化研究グループと雑誌受入合理化研究グループとが中心になって、本館では、館員のコンピューターに対する知識の向上を計るため、4月から、NHK：コンピューター講座16mmフィルムを使って、次のような講座を開講する予定である。

内 容 基礎から簡単なプログラミングまで

対 象 図書館業務（広義）に従事している職員、ただし、坐席に余裕がある場合は他の職員にも開放する。

定 員 40名

期間・頻度 4月から6か月間 毎週1回2時間ずつ26回

講 師 計算センター 山縣敬一氏（予定）

## 日 程

2月6日（金） 近畿地区国公立大学図書館協議会洋書目録業務研究集会（京都大学）

2月12日（木） 近畿地区国公立大学図書館協議会第10回図書館業務機械化委員会

（中之島分館）

2月17日（火）～20日（金） 第9回ドキュメンテーション講習会（京都大学）

2月25日（水）～27日（金） ドイツ新刊書展示会（本館）

## 人 事

### 職員の移動

出張 閲覧課長 藤井和夫

欧州諸国における最近の大学図書館活動についての調査のため、連合王国、オランダ、ベルギー、フランス、イタリア、スイス、ドイツ連邦共和国、オーストリアおよびデンマークの各国へ出張を命ぜられ2月15日東京国際空港を出発しました。帰国は3月6日東京着。

採用 本館（受入掛） 橋本久美子（2月1日付）

退職 本館（ " ） 羽多野元康（1月20日付）